

多面的なテーマを通して「平和」を考える授業を必修化

広島大学

広島大学は「平和について考えることは被爆地にある大学の使命」との考えから、2011年度、「平和科目」を必修化した。原爆や戦争にとどまらず、貧困、環境、経済など、現代社会が直面する問題を扱い、平和につながる普遍的価値を追究する内容だ。統合移転というキャンパスの発展が、大学の原点とあらためて向き合うきっかけになった。

東広島への移転が必修化検討の契機

被爆都市「ヒロシマ」にある国立大学として、いち早く平和科学研究センターを設置するなど、平和について先進的な取り組みを行ってきた広島大学。2011年度から開始したのが、1年生対象の「平和科目」の必修化だ。「平和科目群」は、前後期合わせて19科目、全25コマ。ヒロシマや戦争を考える授業のほか、貧困、飢餓、人口増加、環境、人権、文化など、その内容は多岐にわたる。広く平和をとら

え直し、多角的に理解していくために選定された科目だ。

1年生はその中から1科目を選び、履修する。試験に加え、レポートの提出も義務づけられている。平和への思考を深めてほしいという願いからだ。

以前にも平和に関する選択科目は存在していたというが、今回、全学生必修としたのには、どのような理由があったのだろうか。

「学内には平和に関する施設がいくつかあるが、あくまでも研究機関。教育に重きを置いてはならず、広島大学としてこれでのいいのかという思いが

あった。広島大学は理念5原則に『平和を希求する精神』を掲げている。この理念を軸に、全学生に平和科目を必修化できないか、数年前から検討してきた」と、教養教育本部カリキュラム部門副部門長の林光緒教授は言う。

この授業を開講させるまでには、学長をはじめ、長年、広島大学の教員としてかかわってきた多くの人の思いがあった。もともと広島大学は、広島市の中心部に位置し、被爆した校舎がそのまま残されるなど、戦争の惨禍が濃いキャンパスだった。近隣には原爆ドームや平和記念公園などさまざまな施設もあり、大学から課せられなくても日常的にフィールドワークができる。学生にとって被爆地「ヒロシマ」を身近に感じられる環境だった。

しかし、1995年に一部の学部を除いて東広島キャンパスに移転。物理的にも心理的にも、ヒロシマから遠ざかってしまった。

「以前はあえて平和について授業をしなくても日常的に問題を感じていた。移転によって、学生が平和について考えなくなるのではないかと危機感が募った」と林教授は語る。

平和に対する関心を問う「学長からの宿題」

2007年に浅原利正学長の発案で「平和に関する教育検討ワーキンググループ」を設置。平和科目の必修化を前提に、さまざまな議論が行われた。

「必修化の大きな壁になったのは、イデオロギーの問題だった」と、ワーキンググループ座長の川野徳幸准教授は言う。平和とは、さまざまな思想を包括する問題であり、一つの視点からカリキュラムを体系化するのは非常に難しいというのが、多くの教員の危惧するところだった。「平和科目が、一方的なイデオロギーの押し付けにならないか」「そもそも平和とは学ぶものなのか」、活発な話し合いが続いた。

その間、「学生たちにも平和学習について問うてみたい」と、2008年度の新入生には「学長からの宿題」が出された。広島市の平和記念資料館や江田島市の旧海軍兵学校、福山市のホロコースト記念館など、平和に関するモニュメントを見学し、レポートを提出するというものだった。レポートの提出期限は5月の連休明け。学生の自主性を尊重するため、授業ではなく課外活動と位置付け、単位認定もしなかったが、83.6%の学生が提出した。

「平和＝戦争がない状態？」と書かれたパンフレットを入学時に配付した。その中で、現在は戦争をしていない日本でも、さまざまな社会的格差や差別があること、貧困や飢餓のために平均寿命が50歳に満たない途上国が少なくないことなどを指摘。真の平和とはどのような状況なのかを考えさせ、初代学長が好んで使ったというユネスコ憲章の言葉をもとに「広島大学の学生である貴方は、心にどのような平和の砦を築くのでしょうか」という問いかけがなされた。

モニュメント見学報告集には、「悲痛な体験を前史に持つ大学として、平和に関する意識は教職員と学生とが一体となって守り育て、次の世代に継承していかなければならない課題であり、使命である。私たち構成員は、本学の個性がこうした使命と深く結ばれていることを再認識する必要がある」と記されている。

以後、この宿題は3年間続き、大学側の期待以上に内容の濃いレポートが集まった。同時に行ったアンケート調査では、「これからも継続して平和について考えたい」という学生が毎年9割以上おり、「平和科目があれば受講したい」という意見も多かった。「県外からの入学者の中には、平和教育に期待しているという者が少なからずいる」と川野准教授は語る。

一方、学内ではこのプロジェクトと並行して、教養教育の改革が進み、平和科目必修化もその一環として検討された。

教養教育本部支援グループリーダーの原義孝氏は「広島大学に来たからには、入学時から平和を学び、将来にわたって平和への意識を持ってもらいたい。また、浅原学長は『戦争のみならず、多様な観点から平和を考える場を提供したい』と考えている。その流れの中で、従来あった平和に関する科目を統合し、一つの『群』として充実させ、提供することにした」と話す。

複数の科目を集めて自由選択制にしたことにより、懸案のイデオロギーの問題も解決したという。

授業の充実や連携を図り特色をより鮮明に

2011年度の前期は、2500人の1年生を振り分けるのに、人数の調整がうまくいかなかったことなど、しくみの



新入生全員に無料で配られている「平和バッグ」。デザインは学生公募によって選ばれた。

見直しが必要な面はある。それでも、「平和についてこれだけ充実した科目群を持つ大学はほかにない」と、教員たちは胸を張る。

「授業の中身はまだ検討の余地があり、変えていくつもりだ。戦争の背景を知るのも重要。根本をたどれば平和という観点で語れる科目はほかにもたくさんあると思う」と林教授は言う。

現在は1年生の必修科目となっているが、今後は2年次以降も平和について継続的に学べるカリキュラム編成も検討していくそうだ。

「学部の平和に関する授業と連携したり、大学院で平和学を学ぶコースができたりすればおもしろい。『平和を学ぶ大学』として、より強く社会にアピールできるようになる」と林教授。

カリキュラムがさらに充実すれば、「被爆地ヒロシマ」の大学として、他大学とは一線を画す特色が打ち出せるだろう。

グローバル化が進み、人類全体で地球をどうするかを考えなければならない時代だ。広島大学を卒業した学生には、平和を希求する精神を持って社会で活動してほしいという願いがある。

川野准教授は言う。「学生にはまず、考える力を身に付けてほしい。広島大学の学生であれば、そのテーマが平和であってしかるべき。そのためにも、平和科目をより骨太なものにしていきたい」。

平和科目群の内容

【東広島キャンパス 前期】	【東広島キャンパス 後期】
広島と平和 平和を考える 平和と人間A—環境と生物の未来へ— 平和と人権—グローバル化とジェンダー視点 原爆体験と表象／文学 グローバル・パートナーシップ学 ヒロシマ学 戦争と平和に関する総合的考察 環境と平和 広島と平和 ヒロシマ発平和学 世界大戦の時代 平和とは何か 医学からみた戦争と平和 国際関係論	平和を考える 平和と人間B—人間と文化の未来へ— 平和と人権—グローバル化とジェンダー視点 原爆体験と表象／文学 飢餓・貧困・環境問題からみた平和学 ヒロシマ発平和学 平和とは何か 戦争と平和に関する史的研究
	【東千田キャンパス】
	平和と人間C—広島で学ぶ(原爆とは何だったか) 平和と人間D—広島から未来に向けて